

今年度もいよいよ終わりの日を迎えました。休み時間、授業、放課後と様々な機会でご利用いただき、ありがとうございました。ここで出会った本や人、さまざまな情報は、あなたの種となり、いつか花を咲かせることでしょう。大事に育ててくださいね。さて、今月号は特別号です。出会いがあれば別れがある。今年度をもってご退職される先生方にみなさんへのメッセージをいただきました。一字一句大切に受け取ってください。

- 質問事項
1. 生徒に推薦した本のなかで、印象に残っている本はありますか？
 2. これから読んでみたい本は？
 3. 先生にとって「読書」とはなんですか？
 4. 前西の生徒や図書館に伝えたいことは？

廣澤秀伸 校長先生

1. 『よだかの星』、『グスコーブトリの伝説』ともに宮沢賢治著
『よだかの星』: 自らの「存在」への罪悪感から体を燃やして星へと転生する。
『グスコーブトリの伝説』: 冷害による飢饉で両親を失い、妹と生き別れ、工場に労働者として拾われ、クーボー大博士に出会い学問の道に入る。火山を人工的に爆発させることで大量の炭酸ガスを放出させ、その温室効果によって冷害を食い止めるためにブドリは最後の一人として火山に残る。
2. 名作と言われているもので、まだ読んでいないものがたくさんあるので、退職後はゆっくりと時間をかけて名作に触れたい。
3. 人間は間違えるものであり、迷うものであり、神にも悪魔にもなるものだと思う。人が獣と違うのは知性を持ち合わせているからであり、知性を得られない人は獣と同じ。人間とは思えない間違っただけの行いをする人の多くは知性が欠落している場合が多い。
その知性を獲得する方法が読書だと思う。視聴や鑑賞も同じかもしれないが、読み直したり、考えたりするには読書が一番咀嚼しながら学べる。
4. 読書は習慣にしないと長続きしない。スマホから情報は得られるが、知性は得られない。情報は知識の断片であり、知性は知識を複雑に組み合わせた構造物だと思う。
知性を身に付けば、情報を収集して整理して組み合わせて知的な行動や知的な財産を残せるが、情報に流されるだけで生かしていない人の多くは読書をしていない人だと思う。スマホ族の人たちに言いたい。「その情報、何のために必要ですか？」

近藤博 教頭先生

1. 『ノモンハンの夏』 半藤一利/著
満州(中国東北部)とモンゴルの国境線、何も無い草原地帯を巡り、日本軍とソ連軍との間で起きた紛争で多くの将兵が犠牲となりました。かつての大日本帝国陸軍の組織の中での意思決定が一国の先行きを左右することになった事件でした。この事件から、きわめて優秀な軍官僚＝組織のリーダーが「何も学ばなかった」こと、そのことが強く印象に残っています。
2. 『新章 神様のカルテ』 夏川草介/著
3. 「晴耕雨読」。雨の日に時を過ごすための手段かな。
4. 皆さんがこれからの社会を生きていく＝お金を稼ぐためには、学歴だけでは無く、学力や知識、コミュニケーション力を身につけることが求められます。そのためには「読解力」や「表現力」を磨かねばなりません。読書は、「読解力」や「表現力」を磨く有力な手段です。本を読む機会を増やしてください。

上
原
正
広

先
生

1. 新たに推薦します。
『へんないきもの』 早川いくを/著 絵も面白いが文章も面白い本です。
2. 生物・宇宙に関するもの
3. 勉強であり仕事であり趣味
4. とにかく本を読む習慣を身に付けること。
今は理解できないかもしれないが、いつか必ず自分を助けてくれる力となる。

ウラ面に続く





オモテ面から続く

- 質問事項
1. 生徒に推薦した本のなかで、印象に残っている本はありますか？
 2. これから読んでみたい本は？
 3. 先生にとって「読書」とはなんですか？
 4. 前西の生徒や図書館に伝えたいことは？

石関政志 先生

1. 『夜と霧』 ヴィクトール・E・フランクル/著

この作品は、心理学者である著者が、第二次世界大戦中に強制収容所に入れられた体験を綴ったものである。しかし、ここに描かれているのは、収容所生活の悲惨さやナチスの冷酷さではない。無論それらについても記されているが、それらは作品の中核をなしてはいない。ここに書かれているのは、人間そのものであり、人間の心理である。極限状態に陥った人間がどう振るまい、何を感じていたのか、その精神状態を冷静に分析している。

この本に書かれている人間の精神に関する記述は、驚くことばかりだが、中でも私が驚いたのは、「放免」についての記述だ。収容所生活から開放されたとき、「うれしい」という感情が湧かなかったというのだ。それどころか、今まで理不尽に奪われていたものを取り返すために、他者の権利を侵害することに何のためらいも感じなくなかった者も少なくないという。長い収容所生活が、人々の精神を蝕んでいたのだ。精神は病むものであり、壊れるものだ。

収容所には、自分たちの仲間から選ばれた、カポーという監視役がいた。実はこのカポーの多くがナチスの兵士よりも無慈悲で残忍であったと著者は記す。人は極限状態の中で、どう生きるかが試され、そしてその人間の本性が現れる。極限状況においては、むき出しの真の人間性があらわになる。自分が苦しい状況にありながら隣人に配慮できる人間もいるし、隣人を苦しめることによって自己の幸福を感じる人間もいる。

私は現在の日本の平和が続くことを願ってやまない。戦争や飢餓、大規模な天変地異が起こることを心から恐れている。それは私が善人だからではない。極限状況の中で、自らの卑しい本性が白日の下にさらされてしまうことを恐れるからである。

『茶色の朝』 フランク・パヴロフ/著

友人のシャルリーが、自分の犬を安楽死させたと聞いて、「俺」は驚く。「ペット特別措置法」により、猫も犬も飼って良いのは、優生であると証明されている茶色だけ。シャルリーの犬は、茶色ではなかったのだ。自分たちを取り巻いているものが次第に茶色に染まって行き、気がつくとも新聞もラジオも茶色一色、政党も茶色党独裁に。

この茶色は、国によって推しつけられたわけではない。様々な法律は自分たちが選んだ議員によって立法されたものだ。それだけではない、人々は生活の茶色化を推し進めるための自警団まで組織している。独裁は突然始まるわけではない。

「俺」は始末した猫の代わりに、新しい茶色の猫をかわいがりながらつぶやく。「街の流れに逆らわないでさえすれば安心が得られて、面倒にまきこまれることもない。」ところが、茶色以外の犬を飼ったことがあるという理由で友人が逮捕され、そして、ある朝自分の家のドアがノックされたところで初めて気がつく。嫌だと言うべきだった、抵抗するべきだったと。

主人公は特別怠惰な人間ではない。ごく普通の善良な大衆の一人だ。毎日忙しく働き、もめ事を嫌い平穏を愛している。が、もめ事を嫌い、そこに安住していただければ自分たちの生活を守ることはできない。丸山真男が言うように、自由は日々自由になろうとすることによって、はじめて自由でありうるのだ。

この作品は、その語り口は穏やかだが、伝えるメッセージは鋭く読者の胸をえぐる。しかし、えぐられてなお実際の行動には結びつきにくい。自分の弱さが再確認される一冊である。

2. 古典的な本で、未読のもの。
3. 娯楽。テレビや漫画、映画と同じようなもの。
4. 読書の「楽しみ」は積極的にいかないと味わえないので、ぜひ積極的に楽しんでほしい。

田中純夫先生

1. 『人の砂漠』 沢木耕太郎/著
2. 夏目漱石全集
60歳で読むとどんな感じなのか興味があります。
3. 身体の奥底から元気してくれる栄養剤

皆さまいかがでしたか。
前西図書館は先生方の思いをしっかりと
なげていくことを誓います。お忙しい中
お引き受けくださった先生方にこの場を
お借りして 厚く御礼申し上げます。

